

自己評価システムを組み込んだ社会科の授業設計

－ 第5学年「わたしたちのくらしと森林」を例に －

A Development of Social Studies Instruction based on the System of Self-Evaluation

－ the Construction of Lesson Plans for “Our Life and Forests” in the Elementary Social Studies －

堀 口 俊 雄

(鹿児島市立西陵小学校)

I はじめに

「新しい学力観」のもと、教育現場においては「支援」や「子どもの側に立つ」などの言葉が流行している。しかし、実際は「指導」という言葉を「支援」と入れ換えたり、指導を放棄した「子どもに任せきり」の授業であったりするものが多い。

また、社会科の場合、社会科オリジナルの評価法の開発も遅れている。

そこで、「社会科独自の“支援”」について研究を進めることにした。社会科は「社会認識を通して市民的資質の育成を図る」ことを目的としている。そして、社会認識の形成、市民的資質の育成を図る支援の一つが「自己評価」である。本研究では、社会認識の形成を図りながら、これまで子ども自身が気付かなかったよさを自ら把握していくことができる自己評価の手法の開発を試みた。

研究の手順は次の通りである。まず、これまでの自己評価研究を整理し、社会科の自己評価研究の課題を把握する。次に、学習心理学等の成果に基づき自己評価のメカニズムを明らかにし、社会認識の階層性と学習方法・技能の習得を視点に、自己評価の評価法を開発する。自己評価の評価法を基に社会科授業実践事例を分析し、社会認識の形成に有効な自己評価のパターンを類型化する。最後にこれまでの成果を意図的に組み込んだ授業モデルを構想する。

II 社会科の自己評価研究の流れと課題

1 社会科における自己評価研究

文部省刊行資料、社会科に関わる教育雑誌等を分析した結果、自己評価研究史は以下のようにまとめられる。

○ 1970年代は、学習の主体化という考えに立ち、自己評価を評価の理想と位置づけながら、子どもの認識内容を評価の対象としていた。

○ 1980年代は、小学校児童指導要録に「関心・態度」の観点が付加されたことや「自己教育力」育成が強調されたことを背景に自己評価研究が進展した。自己

評価は、情意的側面を評価する手段や「個別化・個性化」の手だてとして活用された。

○ 1990年以降は新しい学力観を背景に自己評価研究が進展している。自己評価の評価内容は、認知的側面と情意的側面の両面で捉える動きが出ている。

2 社会科における自己評価研究の課題

先行研究の整理から、課題は以下の2点に集約される。

- (1) 自己評価の意義を理解せずに、形式だけ自己評価を行わせ、教師の評価資料としてしか自己評価が活用されていない。
- (2) 自己評価はそれ自体が独善的なものになりがちであるので、自己評価の信頼性、妥当性を高めなければならない。

III 自己評価の評価法

1 自己評価のメカニズム

自己評価によって「ある状態(状態Ⅰ)」が「別の状態(状態Ⅱ)」へと変容したことが把握される。具体的には、話し合いや教師説明などによって自己評価が促され、子どもは学習内容を自覚したり学習による伸びを確認したりして、自分自身の変容を捉えていく。話し合いや教師支援といった自己評価の契機を「自己評価の起点」とし、伸びやよさをなどの変容を捉えるものを「自己評価の要素」と位置づける。

このように規定すると、「状態Ⅰ」から自己評価の契機によって自己評価の要素が機能し、「状態Ⅱ」に到るという自己評価のメカニズム(次ページの《図1》参照)が明らかになる。尚、自己評価の要素については、《表1》のように規定した。

《表1》 自己評価の要素〈1〉

自 己 評 価 の 要 素					
A 自己確認		B 新しい視点の習得		C 自己感情	
⑦	⑧	⑦	⑧	⑦	⑧
伸びやよさの自覚	わかって いること や知って いること の確認	わからな いことや 知らない ことの確 認	新しい内 容の習得	新しい方 法の習得	満足感、 成功感、 目標の明 確化 共感(肯 定の)

2 自己評価の評価

(1) 自己評価のシステム

先に自己評価研究の課題として、自己評価の信頼性、妥当性を高めることがあげられていることを指摘した。

安彦忠彦氏は、この点について次のように述べている。

「そして第五に、自分のおこなった『自己評価』をあらためて吟味する『自己評価』、すなわち『メタ評価』をおこなうことである。

これには、単に『自己評価』のみを見ていたのではダメである。第三者による『他者評価』をも含みこんで、それとの対照によって吟味していくことが必要になってくる。

この『自己評価』の『評価』がどれだけ厳密になされるかが、『自己評価』の信頼性や妥当性に対する従来の否定的な見方を変えるうえで重要な意味をもつ。」(〈2〉, pp.11-12)

子どもがメタ評価を行うためには、教師や級友からの他者評価が必要になる。特に小学校段階では、教師からの刻々に与えられる指導的評価活動は、他者評価としての重要な位置を占めている。教師が指導的評価活動を行うためには、子どもの自己評価を教師が評価しておくことが前提になる。そして教師は、評価結果を個々の子どもに指導的評価活動として還元していくことによって、子どもはこの情報を基にメタ評価を行うことになる。

本研究では、教師が子どもの自己評価を評価し、その評価結果を子どもに知らせることで、子ども自身に自己評価の自己評価を行わせることができると捉える。

このように子どもに自己評価のメタ評価をさせることで、「自己評価Ⅰ→他者評価→自己評価Ⅱ」という自己評価のシステムの構築がなされる。

(2) 「書く」ことと自己評価

「書く」ことによって思考は記録されるので、「書いた」ものから思考の過程や結果を知ることができる。

このことから、子どもが「書いた」もの(ノート、イラスト、吹き出し等)を評価することで、次のことがわかる。

- 子どもの思考の遍歴やつまずきがわかり、教師の指導の評価ができる。
- 子どもの思考のつまずきや子どもの実態と教師の指導とのズレを把握することで、指導を修正したり個別指導をしたりという形成的評価活動が展開できる。

つまり、子どもが「書いた」ものを評価するということは、子どもの側からは自己評価、教師の側からは形成的評価を行っているのである。

そこで、自己評価のメカニズムの「状態Ⅰ」と「状態Ⅱ」の見取りは、主に子どもの「書いた」ものから行う。教師は、「書いた」ものを形成的に評価し、評価結果を指導的評価活動として子どもに還元することで自己評価を促すことができる。

また、子ども自身に「書いた」ものを比較させることによって、自己評価を促すことができる。

(3) 自己評価を評価する視点

① 社会認識の階層性

岩田一彦氏は、知識の種類を思考の働きによって記述的知識、分析的知識、説明的知識、概念的知識、規範的知識に分類する知識論を示している。

〈3〉つまり、社会認識には階層性があり、その階層性を示すのが知識の質である。

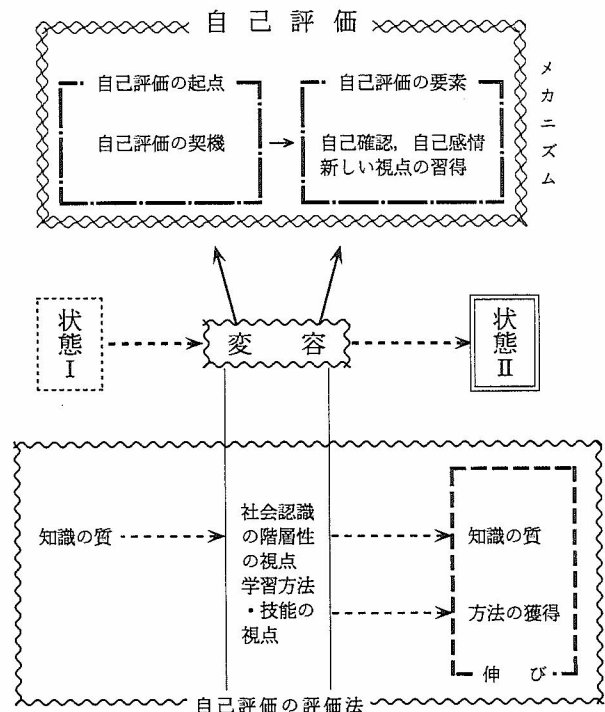
そこで、自己評価による認識内容の伸びは、自己評価前後の知識の質を比較することで見取ることができる。

② 学習方法の獲得

グラフ化、図式化、話し合いなどの学習技能や学習方法は、学習を重ねることで身に付いていく。自己評価によって、認識内容だけでなく学習方法や技能も習得する可能性がある。

そこで、自己評価によって習得される学習方法や技能を把握することで、自己評価の伸びを見取ることができる。

以上のことから、自己評価のメカニズムと自己評価の評価法について図示する。



《図1》 自己評価のメカニズムと自己評価の評価法

IV 自己評価例の分析結果

1 自己評価の類型化

社会科授業実践事例の中から自己評価が有効に機能している50事例を収集し、授業分析を行った。〈4〉その結果、社会認識の形成に有効な自己評価を以下の7つに類型化することができた。

【問題発見型】

作業活動や教師提示資料の読み取り等を通して、学習問題を把握している自己評価。

【活動起点型】

学習問題設定後、追究方法を考えたり学習計画を立てたりすること等を通して、次への活動の起点となっている自己評価。

【問題発見・活動起点型】

作業活動や教師提示資料の読み取り等を通して、学習問題を把握し、さらに追究内容や方法が明確になっている自己評価。

【思考振り返り型】

思考の足跡を振り返り、学習の内容、方法等に関する総合的な評価を行う自己評価。

【思考振り返り・問題発見型】

思考の足跡を振り返り、習得した内容や方法を自覚するとともに、学習を振り返る中で新しい問題を把握する自己評価。

【思考成長型】

学習途中で吟味が行われ、思考を成長させている自己評価。

【技能習熟型】

技能の習熟を目指し、習熟の方法や達成度を評価する自己評価。

2 概念探究・価値分析型社会科と自己評価類型

社会認識の形成に有効な7つの自己評価類型を、概念探究・価値分析型社会科〈5〉の学習過程に対応させたものが《図2》である。《図2》に従えば、社会科の授業設計が可能になる。

自己評価類型	
I 情報の収集	問題発見型
II 情報の分類・比較	
III 学習問題の発見・把握	
IV 予想の提示	活動起点型
V 仮説の設定	
VI 仮説の根拠となる資料の収集	
VII 検証	思考成長型、思考振り返り・問題発見型、思考振り返り型、技術習熟型
VIII まとめ、応用、新しい問いの発見	思考振り返り型、技能習熟型、思考振り返り・問題発見型
概念探究過程	I 情報の収集
	II 情報の分類・比較
	III 学習問題の発見・把握
	IV 予想の提示
価値分析過程	I 価値論争問題
	II 事実の分析的検討
	III 未来予測
	IV 価値判断

《図2》 概念探究過程、価値分析過程と自己評価類型との対応関係

V 自己評価システムを組み込んだ授業設計

1 授業設計の留意点

自己評価システムを組み込むための留意点は以下の通りである。

- 《図2》を基に授業を設計する。そして、学習指導案に「状態Ⅰ」「状態Ⅱ」の学習活動と自己評価要素の構造、習得される学習方法・技能を明示する。
- 「状態Ⅰ」「状態Ⅱ」を見取るためのワークシートを学習指導案に明示する。
- 価値分析過程を設定するために、社会的論争問題を含む教材を選択する。

2 自己評価システムを組み込んだ授業モデル

授業設計の留意点をうけて、授業モデルを小単元「わたしたちのくらしと森林」(小学校5年)において構想した。

※小単元の指導計画(全10時間)〈6〉

- 第1次 オリエンテーション・・・・・・・・・・1時間
- 第2次 森林の働き・・・・・・・・・・4時間
 - ・えりも岬の緑化事業・森林の働き
- 第3次 熱帯林の破壊・・・・・・・・・・3時間
 - ・日本の問題・タイのマングローブ・地球環境問題
- 第4次 緑のサミット・・・・・・・・・・2時間

(1) 問題発見・活動起点型

問題発見・活動起点型は、問題発見型と活動起点型を合成したものである。問題発見・活動起点型を説明することで3つの自己評価類型を示すことになる。問題発見・活動起点型を組み込むか、問題発見型、活動起点型に分けて組み込むかは、子どもの学び方や発達段階によって選択する。本小単元では、第5学年3学期であることから、問題発見・活動起点型を組み込んでいる。

本時(《資料1》参照)は、小単元の第1時である。「学習内容・活動の2」において、襟裳岬の写真の比較(S.28, S.60)と文書資料読みとりを行わせる。この活動によって、襟裳岬が砂漠化したことや現在は回復していることに気づく。また、資料や既習事項(第4学年、開発単元)を手がかりに、「緑化することで人々の生活はよくなったに違いない。」という視点も得られる。

この学習を受けて、「学習活動・内容の3」で、「なぜこのように変化したのか。」という矛盾の認識によって認知的葛藤が生じ、学習問題「襟裳岬を緑化することが人々の生活を豊かにしたのはなぜか。」が設定される(問題発見型)。

その後、学習問題に対する予想をワークシートに記入させる。《資料2》のワークシートの予測では、砂漠化した原因は自然災害である、緑化によって食糧や

収入が増えるため生活が豊かになる、緑化の方法や工事期間についての疑問の3つの内容が記入されている。

このワークシートを基に、砂漠化した理由、砂漠化の影響、緑化の方法、緑化による影響を柱にする学習計画を立てさせる。このような学習計画を立てることによって目標が明確化され、この活動が以後の学習の起点になっている（活動起点型）。

《資料1》 第1時の指導細案（一部）

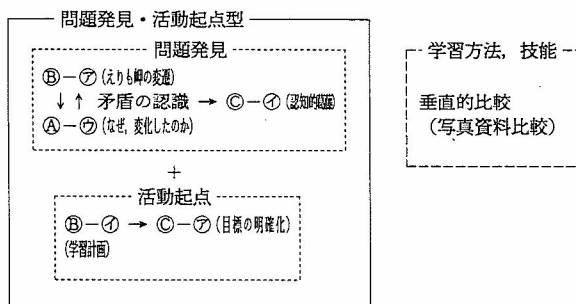
第1時

- (1) 目標 ① えりも岬の砂漠化した状態の写真と現在の様子の写真を比較したり、文書資料（えりもの歴史）を読み取ったりして、学習問題（なぜ、えりも岬を緑化することが人々の生活を豊かにしたのか。）を把握し、学習計画を立てる。

(2) 展開

段階	学習内容・活動	主な発問・指示	予想される児童の反応・留意点	資料
情報収集 ↓ 情報の比較	1 「森林」についてのイメージマップを書く。 2 えりも岬の写真を見たり、文書資料を読んだりする。 《知識A-1》	・「森林」から連想することを書きなさい。 ・気付いたことをノートに書こう。 ◆えりも岬は昔どんな自然環境だったのか。 《問いA-1》	・自然が一杯でハイキングに行く場所だ。 ・木は家や紙になる。 ・木がたくさん集まっているところ。 *イメージマップへは自由に記入させ、森林の機能についての記述はチェックする。 ・砂漠みたいだったのに緑で覆われている。 ・広葉樹の原生林だった。 ・親潮が流れているので豊かな漁場だった。 ◆昔、えりも岬は広葉樹に覆われ、恵まれた漁場をもっていた。 *環境の変化に伴う生活の変化に視点をもたせる。	※ワークシート ①写真（昭和28年と60年のえりも岬） ②えりもの歴史
問いの発見 ↓ 予想仮説 ↓ 学習計画	3 学習問題を作り、学習計画を立てる。 《問いA》	えりも岬を緑化することが人々の生活を豊かにしたのは、なぜか。 ・学習計画を立てよう。	・えりも岬が砂漠化したのはなぜか。 ・森林伐採や冷害がおきたのではないか。 ・砂漠化することで環境にどんな影響が出たか。 ・生活するのが不便になっただろう。 ・緑化事業はどのようなことになったか。 ・森林が再生されて環境にどんな影響が出たか。 *学習計画は時間の経過に従って立たせる。	※ワークシート

③ 問題発見・活動起点型（状態Ⅰ；学習活動2→状態Ⅱ；学習活動3）



《資料2》 ワークシートの認識内容の予測

【第1時～②】（メモ）

学習問題に対する予測を書きなさい。

- えりも岬がさばく化したのは、森林の切りすぎと台風や冷害などのさい害が原因だと思います。
また、えりも岬がさばく化したことで、えりもの人々の生活は苦しくなったと思います。それは、さばくにはあまり人が住んでいないからです。特に水がなくなったのではないかと思います。
そこでえりもの人々は、昔は緑が豊かだったのでさばくをもとのようにすればよいと考えたんだと思います。森林ができれば山さいや木の実、きのこなどの食べ物がとれるようになると思います。また、木を売って収入をふやすことができると思います。
疑問に思ったことは、どのようにしてさばくを森林にしたかということと森林にするのに何年かかったかということです。

(2) 思考振り返り・問題発見型

思考振り返り・問題発見型は、思考振り返り型と問題発見型とを合成した自己評価類型である。既習の学習を受けて新しい問いを持たせる自己評価類型であるので、オープンエンド的な展開が可能である。

今回は紙幅の都合で、具体的な指導細案の提示は省略する。

(3) 思考成長型

《資料3》は、第9・10時の指導細案である。第9・10時は価値分析過程であり、「割り箸を使用するか、否か。」の論争問題について、合理的意志決定を行うように設定してある。

「学習内容・活動の2」では、これまでの割り箸の使用に関する事実の分析的検討を行わせる。そして、割り箸の使用量や原木の採取地、割り箸の歴史等の割り箸に関わる事実を把握させる。

そして、「学習内容・活動の3」では、割り箸の使用を続けた場合と使用をやめた場合との未来予測を行わせ、使用派と廃止派で討論をさせる。割り箸の使用に関する未来予測を使用、廃止の両方の立場で行わせたり、討論をさせたりすることによって、自分の考えの良さや逆に自分に不足している考え方等を得ることになる。立場をかえての未来予測と討論が、自分の思考を振り返らせるだけでなく、多面的な思考を身に付けさせている（思考成長型）。

《資料4》は、第9・10時で使用する3枚のワークシートの記入例である。②のワークシートは、割り箸に関する事実の分析的検討をした後に感想として書かせたものである。②をみると、割り箸の使用量の多さに驚いていること、割り箸の原料への着目、熱帯林への配慮、くらしの豊かさと割り箸との関連等についての記述がある。これらの事実を基に未来予測を行い、割り箸の長所、短所について討論していく。この予測の場合、割り箸の短所を有効利用によって解消しようとする考えに立つことが予想される。

(4) 思考振り返り型

思考振り返り型も思考成長型と同じ第9・10時で説明する（《資料3》参照）。

「学習内容・活動の4」では、割り箸に関する論争問題についての価値判断を行う。価値判断の結果は、ワークシートに記入させ、「学習内容・活動の1、2」で使用したワークシートと比較させる。この比較によって、自己評価が促され自分の伸びを把握できる。

《資料4》の3枚のワークシートを比較すると、はじめは「割り箸の使用はやめるべきだ。」という立場であった（①）が、この学習を進めていく中で「割り箸は使用すべきだ。」という考え（③）に変容していていることがわかる。③の短作文から、②の感想で示した割り箸の有効利用の考えを受けて、①の直感的な判断を科学的に変更していった思考の過程を把握することができる。つまり、学習のはじめは「割り箸の使い捨て」という一面だけで「割り箸の使用反対」を唱えていた。しかし、割り箸に関する事実を検討していく中で、割り箸は木材の有効な利用手段であることや割り箸の文化のよさ、割り箸の再利用法などに気づいていった。そして、これらの事実を基に未来予測し考えをまとめた結果が③のワークシートにある「割り箸の使用賛成」の価値判断である。

このように自分の思考の過程を振り返ることで、自分の考えの良さや事象に対する見方、習得した学習方法等について把握することができる（思考振り返り型）。また、これらを把握することで、学習に対する満足感も得られることになる。

以上のことから、思考振り返り型は、学習内容を定着させるのに有効な自己評価類型であるといえる。また、思考成長型と思考振り返り型の自己評価要素の構造はほとんど同じであるが、思考成長型は自己評価の機会が数度組み込まれているところに特徴が認められる。

《資料3》 第9・10時の指導細案

第9・10時

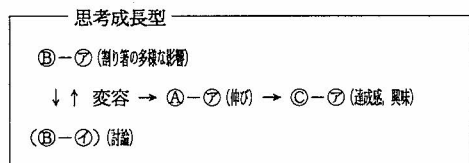
- (1) 目標 ① 割り箸を使用すべきか、使用をやめるべきかについて、合理的に意志決定を行う。

(2) 展開

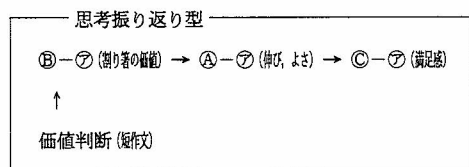
段階	学習内容・活動	主な発問・指示	予想される児童の反応・留意点	資料
価値論争問題	1 割り箸についての価値論争問題を知る。			※割り箸の実物
	《問いⅢ》	・自分の意見を自由に発表しよう。	・割り箸の材料は木だから、森林を守るために割り箸は使わない。 ・割り箸がないと不便だから使っても良い。	※ワークシート
情報	2 割り箸についての事実を検	・割り箸の現状を調べよう。	・割り箸は年間に231億膳生産されている。（国	①割り箸の話

収集	討する。	◆割り箸の歴史や使用状況はどうなっているか。 《問いF-1》	内生産は127億膳で、7割以上が国産材を使っている。） ・割り箸は国内の木材需要の1%未満である。 ◆割り箸は日本独特の林産品で大量に使用されている。 *直感的思考を促し、割り箸に対する見方を自由に発表させる。 *割り箸を使用するか、しないかの現段階の判断を挙手で把握する。	
事実の分析的検討	《知識F-1》	◆割り箸の使用をやめる理由は何か。 《問いF-2》 ◆割り箸の使用を続ける理由は何か。 《問いF-3》	「割り箸の長所」 ・価格が安い。 ・衛生的である。 ・便利である。 ・香りがよい。 ・木材の有効利用に貢献している。 ・炭にして、河川浄化に役立っている。 「割り箸の短所」 ・使い捨て文化の象徴である。 ・森林資源を食い荒らしている。 ・熱帯林減少の原因の一つである。 ・割り箸の歴史は浅いので、文化的価値は低い。	
	《知識F-2》 《知識F-3》	◆割り箸は使い捨ての象徴であり、使用を抑えたほうがよいとする考え方があ ◆割り箸は森林資源の有効利用をしており、使用したほうがよいとする考え方があ *割り箸の長所と短所を様々な観点から検討させる。 *割り箸の長所、短所を学習した感想をワークシートに書かせる。 *割り箸を使用するか、しないかの現段階の判断を挙手で把握する。	※ワークシート	
	3 未来予測をして討論する。	・間伐材の需要の増加につながり森林保護に貢献する。 ・回収のシステムを作り、炭化作業を進めれば環境にやさしい利用ができる。 ・手軽で便利な生活がおくれる。 ・木の香りを実感でき、衛生的にもよい。 ・熱帯林の減少を助長し、地球環境問題を深刻化させる。 ・南北差を拡大し国内林業の進展を妨げる。 ・使い捨ての風潮が広がり、物を大切にしない傾向が強くなる。 ・割り箸に使われる木材量が住宅が2万戸できる。	※児童の準備した資料	
未来予測		*割り箸の利用を続けた場合とやめた場合の未来予測をさせて、利用派と廃止派で討論をさせる。 *参考になった友達の見解や自分の考えの変容は必ずメモさせる。		
価値判断	4 価値判断をし学習の感想を書く。	割り箸は大量生産・大量消費の社会経済システムの生み出す“使い捨て”の象徴であり、熱帯林減少にもかかわらず使っている割り箸は使用すべきではない。 割り箸は間伐材や廃材等を有効利用した日本独特の生産品で生活に密着しており、割り箸生産は森林への投資、労働投下を可能にし、木材資源の維持造成が図られるので、割り箸は使用すべきである。	※ワークシート	
	《知識Ⅲ》	*自由に価値判断させるが、価値判断した理由を丁寧に記述するように指示する。 *割り箸を使用するか、しないかの判断を挙手で把握する。 *価値分析過程で使用したワークシートを子どもに比較させ、伸びを把握させる。		

◎ 思考成長型（状態Ⅰ；学習活動2→状態Ⅱ；学習活動3）



① 思考振り返り型（状態Ⅰ；学習活動1→状態Ⅱ；学習活動4）



《資料4》 第9・10時で使用するワークシートの予測

【第9・10時-①】（メモ）

学習問題に対して、自分の考えを自由に書きましょう。

- わりばしは使わない方がいいと思います。それは、わりばしは木を使っているの、ムダづかいになるからです。
わりばしがあると便利だけれど、1回使うと使い捨てられるのでわりばしは使わない方がいいと思います。

【第9・10時-②】（感想）

わりばしの学習を通して、新しく発見したことやわかったことなどを書きましょう。

- わりばしが年間に231億ぜんも使われているとは知りませんでした。また、その約半分が輸入されていて、中国、インドネシア、韓国、フィリピンからのものであることもわかりました。だから、わりばしの中には熱帯材を使ったものもあるのです。また、輸入されたわりばしは安いこともわかりました。
日本でつくられるわりばしは、間伐材や廃材を利用しているものもあります。建築用には向かない材料をわりばしにしているの、いいことだと思います。しかし、1回の使用で使い捨てするのは、やっぱりもったいないと思います。だから、わりばしを洗って何回も使ったり、炭にして利用したりしていけばいいのではないかと思います。
わりばしの使用がふえているのは、私たちの生活が豊かになり、外食をよくするようになったことも関係しています。

【第9・10時-③】（短作文）

わりばしの使用を続けるか、使用をやめるか、についてのあなたの考えを書きなさい。そして、その理由もできるだけわしく書きなさい。

- わりばしの使用を 続ける。 やめる。
- その理由
わりばしの原料は、端材や廃材、建築には向かない材質の丸太、人工林の手入れで出てくる間伐材などです。だから、わりばしは木材資源を有効に利用していると思います。それに間伐材を利用すると、人工林を育てる費用がふえるので、森林を保全することになります。また、わりばしは日本独特のもので江戸時代からよく使われています。それは、わりばしが衛生的で手軽で便利だからだと思います。
わりばしは使い捨てられるので使用をやめるべきだという考え方もありますが、炭にしたり洗ったりして再利用していけばよいと思います。
以上の理由で、わりばしの使用を続けるべきだと思います。

VI おわりに

社会認識の形成に有効な自己評価の類型を授業実践から帰納的に抽出し、7つの自己評価類型を概念探究・価値分析型社会科の学習過程に組み込んだ。このことによって、自己評価システムを組み込んだ社会科の授業設計が可能になった。

そこで、本研究では、具体的授業モデル「わたしたちのくらしと森林」において、自己評価システムがどのように組み込まれているかを示した。また、ワークシートの認識内容を予測して、組み込んだ自己評価が有効に機能しているか否かについても、検証する方向性を示した。

今後の課題は、以下の4点である。

- 技能習熟型の自己評価を組み込んだ授業モデルの開発を行う。
- 今回開発した授業モデルに従って実践を行い、子どもの変容から研究仮説を検証する。また、他の単元においても授業設計を行い、本システムの有効性を検証していく。
- 文部省の示す観点別評価の4観点と自己評価の関わりを、認識内容を柱にして明らかにする。
- 子ども自身が知識の階層性を把握し、自分の知識の伸びを把握できるような自己評価の手法を開発する。

【注及び引用文献】

- 〈1〉 自己評価の要素の規定については、以下の書を参考にした。

橋本重治、『新・教育評価法総説(下)』、金子書房、1979。

羽生義正編、『教育の基礎としての学習心理学』、北大路書房、1978。

正田亘、松平信久編著、『教育心理学』、晃洋書房、1981。

- 〈2〉 安彦忠彦、『自己評価-「自己教育論」を超えて』、図書文化、1992。

- 〈3〉 岩田一彦編著、『小学校社会科の授業設計』、東京書籍、1991、pp.52-57。

- 〈4〉 授業分析についての対象リストや資料については、拙稿『自己評価システムを組み込んだ社会科の授業設計-自己評価例の分析を通して-』、兵庫教育大学大学院修士論文、1994.12.を参照されたい。

- 〈5〉 概念探究・価値分析型社会科については、次の書に詳しい。

岩田一彦、『小学校社会科の授業分析』、東京書籍、1993、pp.44-48。

- 〈6〉 小単元の学習指導細案は、前掲〈4〉、pp.110-154を参照されたい。